

連載

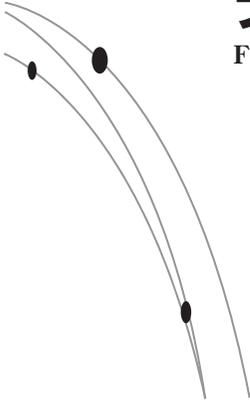
フィールド・アイ

Field Eye

イタリアから——①

武蔵大学 古村 聖

Mizuki Komura



イタリア人の余暇の意義

2015年4月、フィレンツェ空港に降り立った。フィレンツェ滞在は3度目である。博士課程時代に短期で訪れたことはあったが、1年という長期間の滞在は初めてだった。今回は、家族の経済学を専門にしている先生のもとに客員研究員として滞在する。私が家族の経済学を専攻して、この先生と出会ってからすでに5年が経過していた。夢のような機会である。

フィレンツェの街は、ドゥオモを中心に赤い屋根で統一された建物が建ち並ぶ。フィレンツェの西側に位置する大学に合わせて、観光地から少し離れた、中央駅の西側に住むところを決めた。アパートは石造りの3階建ての建物で、私の部屋は3階である。外から見ると、街並みに合わせた歴史のありそうな建物だが、中に入るとモダンで、壁が赤だったり黄色だったり、気分の明るくなるような部屋であった。

私のイタリアでの一日は、朝食に始まる。マキネッタという、直火でモカを作ることのできるポットを火にかけて、モカを片手に甘いパンを食べる。夏には先生直伝のトマトサラダを作った。先生の授業には必ず出席したが、授業がない日も大学に行き、午前中は経済モデルを解析的に解くために計算をして、その結果をもとに受け入れ先の先生と打ち合わせをする。そのまま昼食をはさんで夕方まで議論することもあるし、解散後夕方まで再び計算したりする。帰宅後夕食を食べてから、近所のカフェで1.5ユーロのカプチーノを飲みながら計算を続けるという毎日だった。

大学へはバスに15分揺られて通う。大学では大部屋を若手の先生達と4人でシェアして使わせてもらっ

た。このルームメイトとは時間が合うとよくランチを共にした。おすすめのお店に連れて行ってもらったり、時間がないときはピザをかじりながら、さまざまな話をした。イタリアのこと、休暇の過ごし方、イタリア料理、地域ごとの文化について教えてくれた。休みの日には街を案内してくれたり、お気に入りのエスプレッソのお店に連れて行ってもらったりもした。彼らと一緒に食べたピスタチオのシュークリームの味は今でも忘れられない。

受け入れ先の先生とは、週に3回くらいのペースで打ち合わせを行った。午前から始めて、長引くとよくランチを共にした。キャンパス内のレストランでも英語は通じないので、毎回イタリア語に苦戦した。メニューがわからずに、適当にオーダーすると、他の先生が頼むもののほうがおいしそうだったりするので、同じものを選ぶことが多かった。その場で、先生からイタリアの食事についてレクチャーも受けた。休みの日にはご家族に家に招待してもらったりした。「教育の一環」として食べ物やコーヒー、芸術からイタリアワイン、クリスマスのオーナメントまで教えてもらった。いつも朝から晩までずっと仕事をしている私に、「遊びなさい。楽しみなさい。何事も、内点解が重要だよ。」と、受け入れ先の先生は仕事と余暇のバランスの必要性を説いた。こうして、私はイタリアにおける余暇について考えるようになった。一体、イタリア人は余暇時間に何をしているのだろうか。私が出会った人々はイタリアの一部の人なので非常に断片的ではあるが、ここでは経験を記すことを目的として、私の見たもの、聞いたものを中心に書いていこうと思う。

* * *

まず、イタリアでは家族と過ごす時間を重視する。イタリアの学校での勉強は、授業よりも宿題で学ぶことが中心だそう。たとえば日本の中学生は、夕方まで帰ってこないイメージが強いが、イタリアでは昼食前に家に帰り、午後は宿題をする。このとき、母親が家で食事を作ったり、宿題を見たりする。欧米で比較的低めの54.9%という女性の労働参加率を見てもわかるように、社会進出する傾向にあるもののイタリアではまだ女性は家庭に入ることが多いようだ。家族で食べる食事にも気を配る。イタリアで売られる食品のほとんどは食品添加物が入っていない。マクドナルドなどのアメリカ系のファストフードの店もあるが、多くの人は外食するならレストラン、そうでなければ自宅

で手作りの料理を楽しむ。休みには3時間かけて食事をすることもある。

家族が集う家を大切にメンテナンスすることも休日の重要なミッションである。フィレンツェの建造物の多くが18世紀ごろ建てられたものであり、古い建物の外側はそのままに、内装を自分の好きなスタイルにリノベーションする。歴史的建物なので、ときに思うように機能しないことがある。そんなときは、窓枠を変えたり、床を張りなおしたりする。限られた中で自分のこだわりを最大限活かすために、なんとドアノブの専門店に人気があったりするらしい。あるとき突然立ち寄った家では、初対面の私に、シチリア伝統のカルタジローネタイルの敷き詰められた黄色のきれいなキッチンや、色調の整った寝室や浴室まで見せてくれた。あるとき、ホームパーティーに招いてくれた先生は、「家こそ自分の人生と歴史を表したものだ。自分の一部だから人に知ってほしい。」と言っていた。

私は休日の過ごし方として、周囲の人たちに勧められ、イタリア芸術に触れることにした。壁画が美しい教会や美術館を巡るなど、さまざまなことにチャレンジしたが、特に気に入っているのはフィレンツェ発祥のオペラの鑑賞である。フィレンツェでは五月祭という音楽の祭典があり、夏のシーズンには街中でほぼ毎日、音楽のイベントが行われる。1年を通してコンサートを聴いたり、蝶々夫人など11のオペラを楽しんだ。ときには、大学の先生達の家族と一緒にいくこともあった。生の歌声の迫力、生のオーケストラ演奏の音色は、メロディはなんとなく聞いたことはあっても、物語の中で流れると本当に感動的だった。家の近所にある2011年に完成した最新設備の新オペラ劇場は、音響が素晴らしく、英語の字幕が舞台に映し出されるので、イタリア語がわからなくても楽しむことができる。

しかし一度、1862年に建てられたフィレンツェ市立劇場で観賞しようといつもの感覚で臨んだ私は、英語の字幕がなかったために、歌詞の意味をとることができず、面食らったことがある。それより驚いたのは、始まってから気づいたのだが、そのプログラムが子どものために開かれたものだった。プログラムは子どもが飽きないように短めに作られていた。映画に出てきそうな格式ある深紅色のボックス席から子どもたちが顔をのぞかせているのは不思議な光景だ。真剣に見る子、我慢できずにおしゃべりしてしまう子、眠ってし

まう子、さまざまである。その横では親が解説したり、集中させようとしたり一生懸命であった。日本では、一部で同様の試みが始まっているものの、子どもを音楽の場に連れていくというのは、まだなかなか難しいイメージである。オーケストラのコンサート、ましてやオペラなど、子どもにはなんだか遠い存在である。しかし、幼いころからオペラなどの音楽や美術鑑賞の情操教育を施すため、供給側もそういう枠組みを用意している、この仕組みを確立しているイタリア文化の懐の大きさに驚いた。

食事、美術、音楽——と、観光客に限らず、多くの人々が余暇という時間を有効に利用している。余暇を楽しむ人々であふれた街フィレンツェで、けたたましい音を立てて救急車がドゥオモの横を過ぎる。ここに、イタリアのもう一つの余暇を見ることができる。というのも、市内を走る一部の救急車は、Misericordiaという組織に所属する総勢100人を超えるボランティアで運営されているという。簡単な医療処置であれば彼らが行うそうだ。1244年発足のこの組織には、聖職者、公務員、若者など、ほかで何らかの仕事を行っている人が多く所属する。仕事をしない自由な時間に彼らは、人々の命を守るため、無償で働く。余暇を大切にする彼らにとって余暇で行うボランティアは、医療行為という本職さながらの技術と責任の伴うものなのである。

* * *

こうしてイタリア人の余暇を見てみると、日本人が「余暇＝休み」と考えて、気兼ねしながら取得する休暇とは、違うようである。かつてはイタリアの著名な人たちは余暇に哲学を学んだそうだ。余暇といっても、一見優雅な芸術の楽しみや穏やかな食事の時間は、間接的には子どもの教育や健康投資として、また、そこに対価は発生しないものの、プロ意識と高い技術を要するボランティアを行う時間として、活用されている。もしかしたらイタリアの高いデザイン性や創造力も、こうした余暇から生み出されているのかもしれない。

こむら・みづき 武蔵大学経済学部准教授。最近の著作に“Fertility and Endogenous Gender Bargaining Power,” *Journal of Population Economics*, 2013, 26(3), pp.943-961. 労働経済学, 人口経済学, 公共経済学専攻。